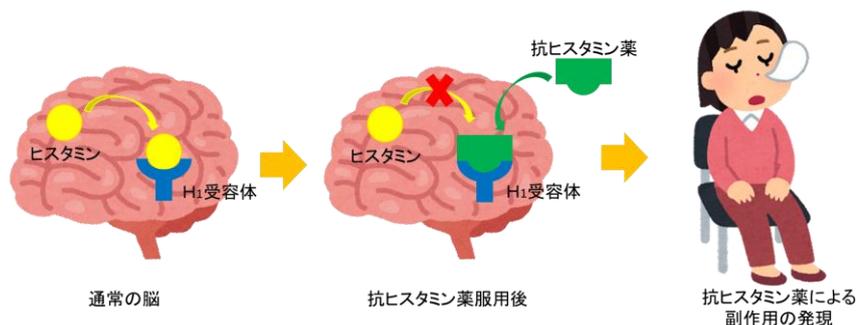


## 抗ヒスタミン薬と自動車運転

花粉症は、日本人の約 4 割が罹患している「国民病」の一つです。花粉症治療のベースとなる薬剤は『第 2 世代抗ヒスタミン薬』とされていますが、第 1 世代抗ヒスタミン薬と比較し副作用は改善されたとはいえ、眠気やインペアード・パフォーマンス(自覚しにくい集中力・判断力等の低下)を起こすものもあります。そのため、抗ヒスタミン薬の多くは、添付文書上に自動車運転等に関する注意喚起文が記載されています。そこで、今回は自動車運転に注意が必要な抗ヒスタミン薬についてまとめました。

### 抗ヒスタミン薬の作用

抗ヒスタミン薬は、アレルギー作用を発生させる物質であるヒスタミンとその受容体(以下、H<sub>1</sub>受容体)の結合を遮断することで、くしゃみや鼻水等の症状を緩和します。一方で、ヒスタミンは脳内の神経伝達にも関わっており、集中力・判断力・作業能率や覚醒の維持に関与しています。抗ヒスタミン薬が脳内で作用すると、脳内のヒスタミンと H<sub>1</sub>受容体の結合が遮断され、眠気やインペアード・パフォーマンスが発現することがあります。



### 自動車運転に関する注意喚起

道路交通法第 66 条では、「何人も、過労、病気、薬物の影響その他の理由により、正常な運転ができないおそれがある状態で車両等を運転してはならない。」とされています。この薬物は、危険ドラッグだけではなく、医療用医薬品や市販の医薬品も該当します。これらの中で、意識レベルの低下、意識消失、失神、突発性傾眠等の報告がある医薬品は、添付文書に自動車運転などに関する注意等の記載がなされており、注意喚起文は「自動車の運転等危険を伴う機械の操作には従事させないように十分注意すること(以下、運転禁止)」と「自動車の運転等危険を伴う機械の操作には十分注意させること(以下、運転注意)」の 2 種類があります。さらに厚生労働省はこういった医薬品を処方又は調剤する際は、医師又は薬剤師から患者に対し、必要な注意喚起の説明を徹底することを求めています。

**【車禁】の記載のある薬剤が処方されている患者さんへ**  
お薬の作用や副作用により眠気・めまい・ふらつき等が起こる可能性があります。  
そのため、高所での作業や自動車の運転等は大きな事故につながる可能性がありますので、避けて下さい。  
気になることがありましたら、医師または薬剤師にご相談下さい。

高の原中央病院薬剤科

## 抗ヒスタミン薬と自動車運転

抗ヒスタミン薬は、その脳内 H<sub>1</sub> 受容体占拠率によって①20%未満；非鎮静性、②20%以上 50%未満；軽度鎮静性、③50%以上；鎮静性の 3 種類に分類することが出来ます。第 1 世代抗ヒスタミン薬は全て③鎮静性に分類されますが、第 2 世代は薬によって異なります。

以下に、一般的な抗ヒスタミン薬の分類と注意喚起文の記載の有無を表にまとめます。

鎮静作用	一般名	商品名	世代	注意喚起文の有無
① 非鎮静性	ビラスチン	ビラノア	第 2 世代	記載なし
	フェキソフェナジン	アレグラ		
	ロラタジン	クラリチン		
	デスロラタジン	デザレックス		
	ベポタスチン	タリオン		運転注意の記載あり
	エピナスチン	アレジオン		
	エバスチン	エバステル		
	ルパタジン	ルパフィン		
	レボセチリジン	ザイザル		
	オロパタジン	アレロック		
② 軽度鎮静性	セチリジン	ジルテック	第 2 世代	運転禁止の記載あり
	アゼラスチン	アゼプチン		
	メキタジン	ゼスラン、ニポラジン		
③ 鎮静性	ケトチフェン	ザジテン	第 1 世代	
	オキサトミド	オキサトミド		
	クロルフェニラミンマ レイン酸塩	ボララミン、クロダミン、 ネオレスタール		
	ジフェンヒドラミン塩 酸塩	レスタミン		
	ヒドロキシジン	アタラックス		

赤字: 当院採用の内服薬

注意喚起文の記載がある医薬品は数多くありますが、ここでは眠気やインペアード・パフォーマンスの報告がある抗ヒスタミン薬を紹介しました。副作用の出方や感じ方には個人差があり、また仕事や生活環境を考えると自動車運転を完全に避ける事は不可能な方もいらっしゃいます。ライフスタイルを考慮した薬剤選択や眠気のある時は運転を行わないなど適切な自己判断も望まれます。

参考文献：各種添付文書、治療薬ハンドブック 2023、薬がみえる Vol. 4、道路交通法、

谷内一彦 薬理作用から見た理想的な抗ヒスタミン薬治療 耳鼻咽喉科学会誌 123 : 196-204, 2020

谷内一彦 「病気から薬の作用を考える」～花粉症治療薬の抗ヒスタミン薬を例に～

([https://www.bureau.tohoku.ac.jp/koho/pub/annual\\_review/2014/jpn/pdf/p23-24.pdf](https://www.bureau.tohoku.ac.jp/koho/pub/annual_review/2014/jpn/pdf/p23-24.pdf))